

科学五輪

「物理オリンピックで日本の高校生2人が初の金メダル」「生物で銀」「化学では銅」――。

そんな成績が世界各地から届く。高校生による科学オリンピックである。

今年の大会は今月半ばから来月にかけて、イラン、ロシア、カナダなどで、科目ごとに開かれている。日本が参加するのは、すでに終わった物理学、生物学、化学に加え、数学と情報の計5科目だ。

全国から選ばれた23人の高校生が世界に挑んでいる。各国の高校生と競う一方で、友情を深める。こんな経験は大きな財産になるに違いない。

科学五輪は科目ごとに歴史も異なり、参加国の数も様々だ。最も古い数学は1959年に始まり、昨年は90カ国が参加した。一方、一番遅く90年に始まった生物学は昨年の参加が47カ国だった。

日本は数学には90年から参加しているが、ほかの科目は、やっとこの数年のことだ。物理学は昨年初参加だった。

高校生よ、世界に挑もう

出される問題は知識だけでなく、各分野の深い理解を求めるものが多い。科目によっては実験もある。たとえば生物学の場合、理論に5時間、実験をしながら解く問題に5時間が当てられる。

成績の上位1割に金、2割に銀、3割に銅のメダルが贈られる。日本は昨年、23人が参加し、5人が金メダル、7人が銀メダルと善戦した。

だが、中国はもっとすごい。昨年、参加した23人全員が金メダルを手にした。10万人以上の中から選ばれた選手が長期間の特訓を受けたそう。成績の上位には、韓国、ロシア、台湾なども並ぶ。

むろん、単にメダルを取ればいいというものではない。日本で気になるのは、世界の舞台に挑もうという高校生が少なく、層が薄いことだ。その背景には子どもたちの理科離れがあり、科学好きのすそ野が狭いことがあるだろう。

もっと多くの高校生が科学五輪に挑むことで、科学の魅力に触れるきっかけに

できないか。こうした挑戦を支えようという社会の応援もほしい。

日本でも参加を後押ししようと、今年3月、ノーベル賞受賞者の江崎玲於奈氏を委員長に、文部科学省の肝いりで日本科学オリンピック推進委員会が発足した。資金援助をするほか、各地の高校などに呼びかけて、多い科目でも1千人を超えるくらいほしいという予選参加者を3倍以上にふやすことをめざす。

すそ野を広げるとともに、科学に秀でた高校生の才能を伸ばす工夫も大切だ。大阪大学は物理学五輪の日本代表選手は無試験で入学できる制度をつくった。

こうした制度はもっと増やしてほしい。09年には茨城県つくば市で生物学、翌10年には東京で化学の大会が開かれることも決まった。03年の数学五輪が東京で開かれて以来のことになる。

世界の優秀な若者に日本を知ってもらおう願ってもない機会になる。迎え撃つ日本もいまから腕を磨いておきたい。